

この問題で問われていること

写真と組み合わせる文章を書いて、次のことができるかどうかをみる。

写真から必要な情報を読み取ること。

写真の情景を説明する描写を工夫して書くこと。

目的や意図に応じて、文章の種類を選んで書くこと。

身に付けると...

情報を適切に取り出し、伝えたいことを明確にして書くことができます。

【解答と解説】

文例1【説明文の場合】

「天災は忘れたころにやってくる」十一月十一日、季節外れの熱帯低気圧が九州北部沿岸を襲った。風速十五メートル、波の高さ四メートル。港では荒れ狂う波が防波堤にぶつかり、白いしぶきを空高く吹き上げていた。人も小舟もひとたまりもないたろうと思える勢いである。文字通り、波を防ぐために作られた人工の堤は、自然の猛威の前には頼りなさがた。改めて防災の大切さを思う。備えあれば憂いなし。防災の意識を忘れないようにしたい。

文例2【随筆の場合】

「波」
荒れ狂う波。逆巻く波。白い水しぶきをあげて波がたけり狂っている。防波堤に行く手を阻まれた波は、怒りに震えてそびえ立ち、防波堤を飲み込まんばかりだ。ヒューヒューと波をそのかすような風の音。その音が、時にこご音となって波を蹴らせる。風と波とが、目に見えぬ気圧の谷で演じる舞台の前に、人間はなんて無力なのだろう。自然の中で生かされている事実を思い知らされる一幕である。

写真に付いたキャプション（写真を説明する文や言葉）が「港の防波堤を越える波」であることから、暴風の吹き荒れる港の情景であることが分かります。課題は新聞記事を書くという設定ですから、ここでは事実を分かりやすく伝える「説明文」（事件記事に多い）と、事実から考えたことを伝える「随筆」（コラムに多い）の文例を挙げて解説します。

文例1【説明文の場合】

・条件2の見出しは、写真が波の様子を伝え、自然災害の恐ろしさを考える文章なので、「天災は忘れたころにやってくる」という、防災の重要性を忘れないでほしいと訴える言葉にしています。
・条件4の情景描写としては、——線部が、擬人的表現になっています。

文例2【随筆の場合】

・条件2の見出しは、嵐の情景を目の前にして、その荒れ狂う波のものを「さ」と人間の無力さを対比して考えたことを伝える内容なので、一番印象的なもの（波）を用いています。
・嵐を擬人法で描写しています。

ワンポイントアドバイス
情景描写のための工夫には次のようなものがあります。
・擬人法を使う。（文例の——線部）
・擬音語を使う。（文例の——線部）
・比喩を使う。（文例の——線部）
例：「舞台」は「幕」は目の前の情景を演劇にたとえています。